

中等部第3回

国語

令和4年2月4日実施

50分

2022年度

〔受験上の注意〕

- 一、問題は〔一〕・〔二〕があります。
- 二、解答時間は五十分です。
- 三、解答用紙はこの冊子の最後にあります。
キリトリ線より切りはなしてください。
- 四、問題用紙・解答用紙の所定のところに書いて
記入してください。

受験番号	氏名

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

一 通り翌日の仕込み作業が終わって、結女は売上計算を行っているノートパソコンの時計を見た。もう午後八時を過ぎていた。翌日営業分の仕込み、店内の清掃と売り上げの処理まで終わると、自宅に帰るのは深夜になってしま

う。翌朝は日の出前に起きて開店準備を始めなければならない。そんな生活が、もう十年続いている。二十五歳で結婚してから、結女はずっと専業主婦だった。だが、十年前に夫が突然のリストラに遭って無収入になっ

てしまい、自身も仕事を探さなければならなくなった。経済的苦境の中、藁にもすがるような思いで開店させたのが、ここ、『おむすび・結』だ。

① 思えば、『結』の開店までには、いろいろな「縁」があった。今現在『結』が出店している雑居ビル一階の店舗スペースは、元々『すゞ香』というカウンターのみのお寿司屋さんが長年営業していた場所だ。狭小店舗ながら地元の人に愛される名店で、結女も何度か食べにいったことがある。けれど、求職活動中のある日、面接の後に店の前を通りがかると、『すゞ香』が『モア』というカレースタンドに変わっていることに気づいた。いつの間に、と驚く。それだけ、ずっと家の中に閉じこもって生活していたという

ことかもしれない。昼食を取っていなかった結女は、スパイスの香りに引かれるまま『モア』に入ることにした。するとさらに驚いたことに、お店を営んでいたのは娘が小学校の頃に同級生だった子のご両親であることが判明した。娘が小学校を卒業して以来の再会だ。

午後の遅い時間だったこともあって、他にお客の姿はなかった。昔の思い出話などをしつつ、何気なく厳しい近況のことを話すと、店主夫妻が顔を見合わせ、なにやらひそひそと相談を始めた。

「あの、よかったらなんですけどもね」

「は、はあ」

「星野さん、ここでお店やられませんか？」

②「お店？ へい？」

実は、『モア』の店主は『すゞ香』の大将の息子さんで、ビル自体も一家の持ちビルであった。大将が持病のために寿司屋を閉めた後、息子夫婦がカレースタンドを開店したものの、スパイスのにおいが他テナントに影響してしまい、移転を余儀なくされてしまった。幸い『モア』の移転先は決まったものの、代わりにビル一階スペースに入ってくれる店子を探している、ということだった。

「でも、私、飲食店なんてやったことないですし」

「はは、うちもそうでしたよ。カレーは趣味の延長みたいなもので」

「別に、お料理が得意なわけでもないですしねえ」

結女がなにげなくそう言うと、二人とも「えっ」と声を上げた。

「でも、あの頃、娘たちの間では有名でしたけどねえ」

「え？ 私がですか？」

「そうですね。星野さんちのおにぎり、びっくりするほど美味しいって」

あ、おむすび、と、結女はきゅっと両手を握り合わせた。

自分で言った通り、料理は昔からそう得意だったわけではない。それでも、田舎の母親に熱心に仕込まれたおむすびだけは、人に「美味しい」とほめてもらえることが多かった。でも、おむすびが商売になるなんて、それまで考えたこともなかった。

「昔、運動会の時にごちそうしていただいたじゃないですか」

「あ、はあ」

「あれ、美味しかったなあ。今でも思い出しますよ」

結女の娘がまだ小学生だった頃、運動会の日はおむすびを大量に作って行って、同級生の子やその家族にふるまうのが恒例だった。結女のおむすびはいつも好評で、嬉しさのあまり、毎年どんどん作る数が増えた。そのうち、半ば仕出し弁当屋のようになってしまって、夫にも娘にも呆れられたのだが。

「実は、親父もうちの娘の運動会を見に来た時に、一つイタダいたことがありましてね」

「え、すゞ香さんの大将がですか？」

「力加減が絶妙だつて唸ってましたよ。寿司職人が言うんだから間違いないですよ。星野さんがお店を出すつて言えば、親父も賛成してくれるんじゃないかなあ」

「そんな、私なんか」

「ウチの移転先は居抜きなのでね、厨房器具はある程度ここに置いていきますし、初期費用は抑えられると思いますよ。テナント料も、親父に言って都合つけさせますから」

③ 寿司屋時代の名残であるレイゾウケースに、大きな業務用炊飯器。厨房内は狭苦しいが、おむすびを作るだけなら設備は十分だろう。結女の頭の中に、自分が厨房に立つ姿が浮かんで消えた。

今日の面接も、正直、手ごたえがまったくなかった。何社受けても働き口が見つからない。専業主婦がいきなりフルタイムの正社員になろうとしても、なかなか難しいのが現実だ。お店を格安で出させてもらえるなんて、これだけありがたい話はきつと探したって出てこないだろう。

——おむすびはね、人と人とを結ぶものなんよ。

小さい頃から何度も聞かされた母親の言葉が脳裏に浮かんだ。結女が「おにぎり」と言うと、母はそう言いながら「おむすび」と言い直させた。食べる人のことを思いながら心を込めて作ったおむすびは、人と人とを結びつける。それが、母の持論だった。事実、昔配ったおむすびが、困窮する結女と『モア』の店主とを結びつけたのだ。

おむすびがもたらした縁。

④ 生活を守るため、家族のため、結女はその縁を信じることにした。ひそかに貯蓄していたへそくりを使って『おむすび・結』を開店。最初こそ閑古鳥が鳴いたが、バス停の真向かいという立地の良さも手伝って、ほどなく客が来るようになった。お米は『モア』から仕入れ先を紹介してもらい、おむすびの具の材料も、『すゞ香』の大将が海産物の仲卸さんを教えてくれた。原価をぐっと抑えられたおかげで、価格も安めに設定できた。懐の寂しい地元サラーマンたちに、安くて美味しいおむすびは歓迎されたのだ。

※二無二働いているうち、幸いなことに商売は軌道に乗った。小さなお店だし、繁盛店とは言ってもそう儲けがあるものではなかったが、それでも家族の生活費と娘の学費くらいにはなったのである。

気がつけば開店から十年。娘は専門学校を卒業、管理工イヨウ士の資格を取って独立した。夫も再就職して家計は落ち着きを取り戻した。当初の目的は果たされたのだが——。

「いつまでやるのかしらねえ」

誰もいない店の中で、結女はぼつりとつぶやいた。お客さんに来てもらえることはもちろん嬉しいが、時折、自分はそのために生きているのかわからなくなる時がある。朝起きて、おむすびを作り続けて、一日が終わる。毎日がその繰り返しだ。いつまでこの繰り返しが続くのか、想像もつかない。

なんとなくしらっとしてしまった独りの時間をごまかすように、結女はパソコンでお店のブログを開いた。ブログには、明日のおすすめなどを毎日投稿することになっている。

「あら？」

今月の季節メニューを紹介する投稿に、コメントがついていた。「これ、ほんとに美味しいから食べて！」という内容だ。どうやら、よく店に来る「ひかり」のコメントであるようだ。

——おいしいおむすびは、まるでお母さんの味。

印象深い一文に、結女の涙腺が緩んだ。胸の奥がきゅつとなつて、熱いものがこみあげてくる。結女の母はもう他界してしまつたが、母から受け継いだおむすびを美味しいと言ってくれる人がいるだけで、母と繋がっているような気分になれる。

「弱音を吐いている場合じゃないわね」

おむすびは、人と人とを結ぶもの。

結女はそう自分に言い聞かせながら立ち上がった。うん、と気合を入れ、調理器具の清掃に入る。

(行成薫『本日のメニューは。』集英社)

※テナント……貸店舗。

※余儀なく……他に方法がなく。

※居抜き……店や工場などを、設備や家具をつけたまま売ったり貸したりすること。

※閑古鳥が鳴いた……客のおとずれがなく、ひっそりとしていた。

※遮二無二……ほかのことを考えずに、ただひたすらに。

問一 〓線部(a)〜(c)のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 〓線部①「いろいろな『縁』」とありますが、この内容として適切でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ある日、求職活動中の結女が昼食をとるために入った店は、娘の同級生の両親が経営していた。
- イ『モア』は移転することが決まっており、店主は店舗スペースに入ってくれる店子を探していた。
- ウ 結女のおむすび屋が繁盛し、また、夫が再就職したことで、家計は落ち着きを取りもどした。
- エ『モア』の店主の父親は寿司職人であったが、以前結女の作ったおむすびを食べたことがあった。
- オ『モア』の店主たちのおかげで、結女は初期費用やテナント料を低く抑えて出店することができた。

問三 〓線部②「お店?」とありますが、このときの結女の心情の説明としてもっとも適切なものを

次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 顔なじみであるとはいえ、無責任に飲食店の開店を勧めてくる店主にあきれて、困っている。
- イ 地元の人に親しまれていたこの場所で、自分がお店を開くことなどできないと怖気づいている。
- ウ お店を開いてはどうかという提案には驚いたが、おむすびの味が認められ、うれしく思っている。
- エ 偶然入った店の主人から、お店を開いてはどうかという提案を突然されて、驚き、とまどっている。
- オ 求職活動中の自分に、お店を開くことを提案してくれた店主の思いやりの深さに感動している。

問四 〓線部③「結女の頭の中に、自分が厨房に立つ姿が浮かんで消えた。」とありますが、このときの結女の心情の説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 自分が作ったおむすびで商売をすることを、不安に思っている。
- イ 自分がおむすび屋を開くことを、現実のものとして感じ始めている。
- ウ 生活に困っている自分を救おうとしてくれる店主に、感謝している。
- エ 自信が持てなかった自分の料理をほめられ、うれしく思っている。
- オ おむすび屋を営んでいる自分を思い浮かべ、自信を深めている。

問五 〓線部④「生活を守るため、家族のため、結女はその縁を信じることにした。」とありますが、その理由を説明しなさい。

問六 〓線部⑤「結女の涙腺が緩んだ。」とありますが、その理由を七十字以内で説明しなさい。

問七 この文章の内容についての説明としてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 家計を支えるために始めた『おむすび・結』が結果的に繁盛店となったことで、結女は達成感に満たされ、生き生きと働いていたが、よく店に来る「ひかり」のコメントを読んで、これからもお客さんを満足させるために店を続けていきたいと強く思うようになった。

イ 『おむすび・結』の安めの価格設定が地元住民に受け入れられ、母から受け継いだ大切なおむすびで商売をすることに對して結女は申し訳なさを感じていたが、価格ではなく味をほめてくれるお客さんの声があったことで、商売に對して前向きになることができた。

ウ 『モア』の店主からの熱心な勧めで始めた『おむすび・結』の開店から十年経った今でも、結女は自分の料理に自信が持てずに不安な気持ちでいたが、お客さんのコメントを読んで自信を深め、おむすびでさらにお客さんを幸せにしていきたいと思った。

エ 家族の生活を守るために始めた『おむすび・結』の開店から十年が経ち、結女は毎日同じことを繰り返す生活にむなしさを感じていたが、母から受け継いだ大切なおむすびをおいしいと言ってくれるお客さんの存在が、結女のやる気を取りもどすきっかけとなった。

オ 十年間、必死に『おむすび・結』を続けてきた結女は、娘が独立し、夫も再就職したため、これから先も一人でお店を続けることに迷いを感じていたが、ブログのコメントを読んだことで、母から教わったおむすびを娘にも受け継いでいくことを決意した。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文には表記を変えたり省略したりした部分があります。

「モノづくり」から「トづくり」へ

二〇世紀の経済における一つの特徴は、規格化された画一的な商品を大量に生産・消費してきたことです。それにもなつて、地域の固有性も失われていきました。地域それぞれに、歴史や風土に根ざした多様な暮らしがあったのですが、近代的な開発のもとでどんどん失われていったのです。

しかし現代では、そのような経済の仕組みは行き詰まり、これまで失われてきたものが見直されるようになっていきます。人びとはこれ以上「モノ」の量的な豊かさを求めるのではなく、それによつて得られる「知識」や心温まる「感動」といった無形の要素を重視するようになりました。このようなニーズの変化は、従来の経済活動や価値に對する考え方を大きく変えています。

たとえば「モノ」の機能は変わらなくても、あるいは時間がたつて劣化したとしても、そこに「意味」や「物語」（ストーリー）が加わることで価値が大きくなります。芸術作品がわかりやすい例ですが、時間がたつと「モノ」としては劣化しても、歴史的な評価に耐え、生き残ることでむしろその価値は高まります。これは、作品というモノそれ自体ではなく、そこに与えられた「意味」が価値の根拠になっているためです。モノの「意味」が深まって、見ている人の知識や情動が高まれば、それにしがたい価値も増加するのです。

従来の経済の常識では、労働を投下して、新しい財やサービスをつくりだすことによつてのみ、経済的価値は生まれるとされてきました。ところが、何ら新しいものを生産しなくても、すでにあるものに対して「意味」を与えるこ

とで価値が高まるのならば、経済活動の様相は一変します。そのため、現代では「モノづくり」だけでなく、「コトづくり」(ストーリーの生産)が重要になっているといわれます。

X、見えるもの、ふれられるものがあってこそ五感は刺激されますから、「コトづくり」の時代に入っても「モノづくり」の重要性は失われません。大事な点は、そこに知識や情動、倫理や美しさといった無形の要素がどれだけあるかです。

「限界費用ゼロ社会」という表現があるように、すでにあるモノをコピーしたり増やしたりする生産は、デジタル化などの技術によって、限りなく費用ゼロでできるようになります(ジェレミー・リフキン『限界費用ゼロ社会——モノのインターネット』と共有型経済の台頭』NHK出版、二〇一五年。「限界費用」とは経済学の用語で、生産量を一単位増加させたときにかかる追加的費用のこと)。農業にせよ工業にせよ、規格品をたくさん生産するだけでは、値段を安くしていく価格キョウソウに追いこまれてしまいます。

しかしたとえば、技術や知識をもった職人が、厳選された材料から精巧で美しい製品を生み出したならば、その製品はモノそれ自体にとどまらず、他にはない真実のストーリー、固有性を備えるでしょう。ここでは「ストーリー」のほうが主であり、「モノ」はその媒体になっています。「コトづくり」の重要性が説かれるのは、このようにモノにどんな「意味」を付け加えるかが大事だからなのです。

あるものを使う知識のリノベーション

二〇世紀の常識では、地域の発展のためには産業が必要だと考えてきました。Y、二一世紀の経済では、追加費用をかけて、いま以上にモノを増やしていくビジネスモデルは最小限になっていくでしょう。逆に、地域にある

ものをそのまま使うことで、費用を節約することができます。大きな投資がなくても、地域の空間や暮らしそのものが、人びとに求められる「舞台」となるわけです。

知識や情動が消費されるいまの時代に、もっともふさわしくない開発方式は、「スクラップ・アンド・ビルド」です。地域空間において営々と積み上げられてきた暮らしの風景は、いちど壊されたらもとは戻りません。

スクラップ・アンド・ビルドは、工業化・近代化の時代には効率的な開発手法でした。かつては、地域の歴史やその場所のストーリーを「リセット」することこそが開発だ、と考えられていた時代がありました。しかし、建てなおされたその場所は新しくきれいかもしれませんが、他の場所にも次々と新しいものはできるので、その場所ならではの個性を保つていくのはなかなか大変です。

これに対して、歴史のある自然や建物を、完全にスクラップせずに、むしろその雰囲気を守りつつ、時代にあった機能や意味を加えて再生する手法が「リノベーション」です。第3章でもふれたように、リノベーションとはもともとと建築用語で、中古の建築物に対して、現代的に機能・価値を再生するために全面的に改修する事業をさします。

Z 大阪には、昔たくさんつくられた長屋建ての住居があります。その起源は、大阪が商人・町人のまちとして発展した近世にあり、近代に入ってから自治体の都市計画によって再整備されてきた歴史があります。大阪の長屋は、このように長いあいだ引き継がれてきた庶民の暮らしを象徴する「大阪らしい」建造空間です。一時期はその価値が認められず、老朽化が進むにつれ取り壊されてきましたが、近年は、レトロな雰囲気やコミュニティ感が再評価されて、店舗、事務所、宿泊施設などにリノベーションされるようになってきました。モノとしては古くなり、その点では価値を失っていても、別の角度から「意味」を与えられることで、価値が再生するのです。写真※

5・1は、大阪市阿倍野区にある昭和初期に建てられた長屋を改修し、飲食店などに利用している事例です。

地域空間に対しても、さまざまなタイプのリノベーションが展開されています。これまでは、開発しやすいように土地を更地化する[※]のが大前提で、特別に歴史的に価値があると認められる建物が点的に保護されるだけでしたが、本当は、あらゆる場所に歴史があります。

巨額の設備投資によって空間を新しくつくりだすよりも、地域の文脈を読みこみ、再解釈して、求められている「生活の質」や「地域らしさ」を表現することが、むしろ現代的な開発手法になっています。このほうが大きな費用をかけずに済みますし、地域に新たな価値を与えることができるのです。大阪の長屋リノベーションも、現代的な市街地再開発だといえます。

「根っこ」を大事にした地域づくり

※本書の金沢の事例で見たように、都会では薄れてしまったローカルな要素——人とのふれあい、近隣で協力しあうコミュニティ、余裕のある時間や空間、山や海など自然環境への近さ、風土に根ざした衣食住の慣習、歴史を感じるまちの風景、伝統を醸す職人的なものづくりなど——が再評価され、地域に「価値」を与えています。たとえ新幹線が開通しても、これらが無い金沢では、その効果は長つづきしなかつたでしょう。

地域のリノベーションとは、地域固有の自然や景観、伝統、文化、コミュニティなど、暮らしの豊かさを支える「根っこ」の意味を再評価し、地域の資源とすることを意味します。地域住民から見ると、ありふれていて身近な物事かもしれませんが、その歴史的・文化的な意義を知り、新しい面白さを発見することが重要です。全国各地でおこなわれている「地域おこし」や「まちづくり」は、この意味づけ（意味の再評価）によって「地域の価値」をつくらうとする運動だといえます。「地域の価値」が、地域内・外の人の共感をあつめれば、それだけ多くの人が訪れた

り、移住したりすることにもつながります。

人びとに真の感動を与えるには、そこに「本物」がなくてはなりません。「根っこ」とは、その地域で人びとが生きてきたことの積み重ねです。歴史や自然や社会と一体になった人びとの知恵の結晶です。過去からの継承こそが価値を高めます。

（除本理史・佐無田光『きみのまちに未来はあるか？——「根っこ」から地域をつくる』岩波書店）

※情動……一時的に激しくわき起こる感情。

※媒体……何かを伝えるときの手段となるもの。

※長屋……長い一棟の家をいくつかに区切って、一区切りごとに住めるようにした住宅。

※写真5・1……長屋の写真を掲載。ここでは省略。

※更地……手を加えていないままの土地。

※本書の金沢の事例……これより前の章で金沢の町おこしの例を述べている。

問一 線部(a)・(b)のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

問二 X Y Z に入れるのもっとも適切な語を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア そして イ たとえば ウ つまり エ もちろん オ しかし

問三 線部①「そのような経済の仕組み」とありますが、この内容を表している部分を、「〽️すること。」に続く形で本文中から二十字程度で抜き出しなさい。

問四 線部②「コトづくり」とありますが、どのようなことですか。本文中の言葉を用いて説明しなさい。

問五 —— 線部③「スクラップ・アンド・ビルド」、—— 線部④「リノベーション」とありますが、次の例はどちらに当てはまりますか。「スクラップ・アンド・ビルド」であればA、「リノベーション」であればBで、それぞれ答えなさい。

ア 山の一部を切りくずし、伐採した木を用いて、そこに見晴らしの良いリゾートホテルを建築した。

イ ある村に長く放置されていた空き家に手を加え、村の郷土史料を展示する博物館へとつくりかえた。

ウ これまで畑だった場所を整地して、「田舎で暮らそう」をテーマにした複数の住居を建てた。

エ 商店街を大型の商業施設につくりかえ、商店街にあったすべての店舗をその中に移転した。

問六 —— 線部⑤「地域の文脈」とありますが、これと同じ内容を表している部分を、大阪の長屋の例の中から二十字以内で抜き出しなさい。

問七 —— 線部⑥「暮らしの豊かさを支える『根っこ』の意味を再評価し、地域の資源とすること」とありますが、どのようなことですか。本文中の言葉を用いて五十五字以内で説明しなさい。

問八 筆者の主張を述べたものとしてもっとも適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 現代においても、新しい財やサービスを作りだすことで経済的価値が生まれるという考えは根強く残っているため、私たちはその考えを改めるべきである。

イ 技術の進歩により、大量生産が可能になり低価格のものが増えた結果、ものが持つ価値も低下し続けることになってしまった。

ウ 昔から続いてきた地域の歴史を大切にしながら、現代の人にも受け入れられる要素を加えていくことでまちづくりを行う必要がある。

エ 交通環境が整備され、人々が移動しやすくなったことで、都会では味わうことのできない自然や地方の暮らしに対する関心が高まっていった。

オ 二〇世紀のように、無計画に建築物をつくっていくのではなく、残すものと壊すものとを明確に分類して町の整備をしていかなければならない。

国語解答用紙(第三回)

総 点

科 目

国語

受験番号

氏 名

(注意 字数に制限があるときは「・」「や」「も」字とします。)

キリトリ線

〔一〕

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七
(a)						
いた						
(b)						
(c)						
70						
60			40		20	

〔二〕

問一	問二	問三	問四	問五	問六	問七	問八
(a)	X			ア			
		するところ。					
(b)	Y			イ			
				ウ			
				エ			
50							
40			20		20		

